

# 大阪市立大学教員の教育に対する意識の調査について 授業デザインに関する意識を中心に

*A review of surveys on faculty members' view on education in Osaka City University:  
Focusing on course design*

西垣 順子・矢野 裕俊  
大阪市立大学大学教育研究センター

NISHIGAKI, Junko・YANO, Hirotochi  
Osaka City University, Center for Research and Development of Higher Education

**キーワード** : FD、授業改善、カリキュラム改善、教育成果の評価

**Keywords**: faculty development, improvement of teaching, improvement of curriculum, assessment of learning outcome

## 1. はじめに

授業デザインとは、各授業の到達目標の設定から授業の設計、実施、評価までを含む授業作りである。「授業改善」という言葉が非常に狭い意味で使われる際には、授業が「実施」されているときの様子に注目が集まりがちのように思われる。しかし実際には、各授業で教員がどのような技術を使ったり、教材を用意したりするかは、授業デザイン全体を考慮して初めて理解したり評価したりできるものである<sup>1)</sup>。そのため、大阪市立大学における授業実践の状況を把握するためには、授業がどのようにデザインされているのか、授業をデザインするに当たっての問題点は何かといった事柄を把握する観点からの調査が必要である。

そこで本稿では、大学教育研究センターが大阪市立大学の教員を対象に行った質問紙調査のうち、授業デザインに関連が深いと思われる2つの調査をレビューし、その成果と今後の課題について検討する。該当する調査は、2004年に実施した「FDに関する教員の意識調査」と2007年に実施した「授業(コース)のデザインと学習成果把握に関するアンケート調査結果報告」である。なお前者は、本学の教員が教育の改善のためにどのようなことを行っているかについて調査を

したもので、授業デザインのみが調査対象となっているわけではない。しかし後にも述べるように、調査項目の多くの部分が授業デザインに関連するものであるため、本稿のレビューの対象とするものである。

## 2. 「FDに関する教員の意識調査」の目的と結果の概略

### 2.1. 調査の目的と方法

「FDに関する教員の意識調査」は、「FDに関わって本学の教員が日々の教育活動の改善を図るためにどのようなことを行い、またどのような問題をかかえているのかを明らかにし、全学や研究科・学部等において望まれるFDのあり方や課題を浮き彫りにすることをねらいとして(p.1)」<sup>2)</sup>、2004年1月から3月上旬にかけて質問紙調査(資料1参照)として実施された。当時大阪市立大学に在籍していた専任教員全体の65%にあたる573名からの回答を得ることができており、当時の大阪市立大学教員の意識傾向を把握した調査になっていたと言える。

### 2.2. 調査結果の公表先

「FDに関する教員の意識調査」は大学教育研究センターが調査母体として実施し、調査結果は「FDに

関する教員の意識調査」報告書としてまとめられた。報告書は、辻本英夫・永田潤子大学教育研究センター兼任研究員(当時)と矢野裕俊専任研究員が執筆した。発行は2005年2月であり、大阪市立大学内に配布された。現在は残部が、大学教育研究センター内にある。

### 2.3. 調査結果1：教員が教育活動の改善のために実行していること

「FDに関する教員の意識調査」では、授業の改善のために実施していることについて回答者に尋ねた。まず授業の工夫全般について、「大いに工夫している」を5点とする5件法で評定してもらったところ、有効回答者の68%が4点以上の評定をつけた。

具体的な工夫の内容については、「授業内容の意義や重要性について学生に理解させること(実施率78.6%)」「学生の関心・好奇心を刺激するものとなるように授業内容を工夫すること(実施率80%)」のように授業内容を工夫すること(実施率80%)のように、授業中の学生の好奇心や関心を喚起し、授業に集中できるようにする工夫が多くされている様子が伺えた。その一方で、「宿題を課するなど授業前後の予習・復習を重視すること」は27.1%、「本の読み方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方などの指導を重視すること」は28.4%の実施率であり、授業中に学生の興味関心をひきつけるための工夫に比べると、学生の自習に対する配慮は比較的少ないことが伺えた。

さらに授業改善のための方法に関して「授業参観」や「研修プログラム」への参加は1割強しかなかったが、それらを重要と考えるという回答は3割から5割に上っており、当時も提供されていたFDプログラムについて、重要と思っただけでも参加には至っていない教員が少なからずいる現状も明らかになった。

また「学生による授業評価」や「授業アンケート」については、授業改善に役立つかどうかに関して肯定的回答と否定的回答が均衡する結果となっていた。

### 2.4. 調査結果2：教育の重要度と教育活動の実績評価に関する意識

「教育」「研究」「社会貢献」の3つの重要度をどう考えるかについて質問したところ、回答者の7割強が、

若干「研究」の比重が高いものの「研究」と「教育」をほぼ同程度に重要としていた。このことは他大学での調査結果と比べて、大阪市立大学の教員が教育に対して関心が高いことを示している。

さらに、採用・昇進の際の教員の業績評価において、「教科書、教材、学習プログラムなどの開発」「学生による授業評価の結果」「FD活動への参加状況」をそれぞれどの程度考慮すべきと考えるかについても尋ねられていた。教科書等の開発を考慮することは肯定的回答が多数であったが、授業評価結果は賛否相半ばであり、FD活動への参加状況については否定的な意見が多かった<sup>2)</sup>。

### 2.5. 調査結果3：FD等の教育改善に関する認識

全学的なFDへの参加経験は、FD研究会が50%、教育改革シンポジウムが61%であった。勤続年数が20年以上の教員の参加が10年未満に比べて高く、また全学共通教育を担当した経験のある教員の参加経験が、全学共通教育を担当したことがない教員の参加経験よりも高かった。

大阪市立大学の教育を改善するために何が重要かを尋ねたところ、回答者の4割以上が重要と回答したのは「学生の学力・興味・関心の理解(60.1%)」「専門教育カリキュラムの改善(49.8%)」「施設・設備の充実(48.0%)」「教育活動の評価手法の確立(45.5%)」であった。「共通教育カリキュラムの改善」はこれらに次いで高く33.6%であった。なおこれらのうち、カリキュラムの改善については、どのような改善が必要と考えられているのかが明らかではないので、この点の解明が今後の課題と言えるだろう。

## 3. 「授業(コース)のデザインと学習成果把握に関するアンケート調査」の目的と結果の概略

### 3.1. 調査の背景と目的

2007年度に実施した「授業(コース)のデザインと学習成果把握に関するアンケート調査」は、教育の成果の評価に関する大阪市立大学教員の意識を調査するために実施された。

この調査を実施した意図は次のようなものである。上述のFDに関する教員の意識調査も含めて、大阪市立大学の「教育改善」を視野に入れた企画や調査の多くは、「如何にしてよりよい授業をするか」という問題意識のもとに行われており、その結果「教育の成果をどのように評価するか」「教育成果の評価結果をどのように改善に生かすか」という観点が薄くなりがちな部分があった。つまり、PDCAサイクル全体というよりも「計画Plan」とその「実行Do」に主眼が置かれがちになったり、「評価Check」と「改善Action」が視野に入ることがあってもそれが「学生による授業評価」に限定されがちであったりする傾向が見られた。このような状況を受けて、そもそも大阪市立大学の教員が、自らの授業の成果をどのように評価しているのか、そもそも「教育成果を評価する」という自覚を持っているのかどうかも含めて現状を把握する必要があると考え、「授業（コース）のデザインと学習成果把握に関するアンケート調査」が計画された。なお、調査の実施に当たっては、授業（class：毎週、毎時の授業）と授業（course：授業設計・シラバス作りから成績評価まで）を区別して考え、後者についての調査を行った。

### 3.2. 調査方法，調査対象，結果の公表

調査は質問紙調査法（資料2参照）で実施した。全学共通教育の科目を1人で担当した教員のみであり、配布枚数は42枚で回答数は18枚（回答率43%）であった。教育成果の評価を行う場合、毎週の授業ごとに成果を把握するという事は現実的には難しいことが多い。1 Semester全体を通じての当該授業の成果を確認するのが現実的であるため、上述のように調査対象者を限定した。

結果については、報告書への取りまとめは行わず、大学教育研究センター研究員会議及び全学共通教育教務委員会に報告資料を提出した。

### 3.3. 結果の概略と課題

この調査は大きく分けて「授業（コース）の教育目標の達成状況」「授業（コース）の成果を高めるための工夫」「授業（コース）の成果を高めるために必要

と思われること」をそれぞれ尋ねる3つの部分から構成されていた。教育目標の達成状況は概ね良好と判断されており、成績評価結果や学生からの意見（授業アンケートやミニッツペーパーなど）がその判断の根拠として使われていた。授業の成果を高めるための工夫は、上述の「FDに関する教員の意識調査」とほぼ同様の結果が見られていた。多くの教員が何らかの工夫を行っていたが、授業の意義等を学生に説明する「説明型」の工夫が主であり、予習・復習の促進や提出された課題に関するフィードバックといった学生の学習を促す「学習駆動型」の工夫は少なかった。さらに、授業の成果を高めるために必要なこととしては、カリキュラムの改善の選択が最も多く50%あり、設備の改善が3 - 4割であったのに対して、FDの充実を選択した回答者はいなかった。

## 4. これまでの調査の意義と今後の課題

### 4.1. 明らかになっていること

本稿の第2節と第3節の内容をまとめると、本学教員の教育に関する意識については次のようなことがうかがえる。

第1に、大阪市立大学教員は学生の教育に対して一定程度以上に熱意を持っている。研究も重視しているが、教育を重視する比率が研究に比べて著しく低いわけではない。また教育を改善していくための工夫もなされている。第2に、授業をする上での工夫としては「学生に授業の意義を詳しく説明する」といった説明型のものが多く見られる。第3に、授業の成果を確認（評価）したり、学生による授業アンケートの結果を参考にしたりしている様子から、授業のPDCAサイクルについて一定の潜在的認識はもたれていると思われる。第4に、学生の学問への興味や基礎学力についての情報が十分であるとは考えていない教員が多いことである。

これら全体をまとめると、大阪市立大学の教員は教育を重要だと思い工夫をしようともしているが、その一方で、学生の実情と実際に行われている教育に何らかのズレがあるとの認識がもたれていると言えるかも知れない。そしてこのことは、授業・教育の到達目標

をどこに置くかを、教員同士や教員と学生の間で共有することの難しさを反映しているとも言えるかも知れない。この点については次の項で考察する。

#### 4.2. 今後明らかにする必要があること

大学教育研究センターが実施した教員の教育に対する意識の調査は、今までのところ数もそれほど多くなく、特に「FDに関する教員の意識調査」のような規模の大きな調査は、ここ数年の間は実施されていない。この間に法人化などの大学環境の変化もあったことを考えると、大阪市立大学の教育の現状や今後のあるべき方向性を探るための研究が求められるところでもある。前項までのレビューを踏まえると、次のような4つの観点をあげることができるだろう。

第1に、大学教育の目的（学士課程カリキュラムやそれを構成する授業が目指すもの）について、大阪市立大学教員がどのような意識を持ち、それがどこまで共有されているのかということである。教育の目的をどこに置くかは、どのような教育内容、方法を採用するか、学生の反応（授業アンケートなど）にどう対応するか等を決定的に左右する事柄であるが、この点はこれまでの調査では扱われ方が薄い部分でもある。

第2に、大阪市立大学の教育の現状をどう理解（評価）し、どう改善していくかに関する教員の認識である。これまでの調査では、多くの教員がカリキュラムの改革を求めていることは明らかになっている。しかし具体的に、どのような改革が望ましいと思っているのか、または改革の方向性についてのイメージがそもそもあるのかどうかは明らかではない。

第3に、教員が教育を実施していくうえでどのようなニーズを持っているのか、どのようなことに困難を感じ、それをどのように解決したいと考えているのかということである。これまでの調査は、「教員がどのような工夫をしているか」「どの程度熱心に教育に取

り組んでいるか」という観点から調査が作成されたような側面がある。しかし教育というものは、教員個人が負担と責任をすべて背負ってはい成り立たない。各教員が十分な教育活動を遂行するために、大学として何をすべきなのかを把握する視点が求められる。

第4に、FDに関する要望である。この点は第3の教員のニーズの把握と大きく重なる。これまでの調査では、大阪市立大学教員のFDに対する期待は高いとは言えない。ただしこれは、FDをどのように定義するかにもよる問題である。どのような情報提供や議論が行われるFDならば参加したいと思うのか、また部局でのFDと全学FDのあり方をどのように考えるのか等について、本学の教員がどのような意識を持っているのかを調査する必要があるだろう。また、大学教育研究センターはこれまで、FD研究会や教育改革シンポジウムのような大規模な企画以外に、「大学教育だより」の発行（特にvoice企画）や授業デザインWSのような小規模であるが部局の枠を超えたコミュニティ作りにつながるFD的な企画も実施してきている。このような教育コミュニティ作りに関するニーズや意識を掘り起こすような調査のあり方もまた、検討されてしかるべきであろう。

## 注

- 1) 大学教育研究センターではこの点を考慮して、従来から全学共通教育で実施されてきた「公開授業」の概念を拡充したものとして「授業デザインWS」を実施してきている。これはWS参加者に当該の授業デザイン全体を理解してもらった上で授業について議論をすることを目的とするもので、必要に応じて授業の参観も行うが、授業参観そのものを目的とはしていない。
- 2) 当時の調査の際には「FD活動への参加」が、単なる参加なのか、企画や事例提供という形での貢献なのかを区別して問っていない。



資料1

FDに関する教員の意識調査

回答される あなた についておたずねします。

問1 所属部局は次のどれですか。該当するものの番号を で囲んでください。

- (1) 経営学研究科 (2) 経済学研究科 (3) 法学研究科 (4) 文学研究科  
(5) 理学研究科 (6) 工学研究科 (7) 医学研究科 (8) 生活科学研究科  
(9) 創造都市研究科 (10) 看護短期大学部 (11) 体育学研究室  
(12) 大学教育研究センター

問2 職名は次のどれですか。該当するものの番号を で囲んでください。

- (1) 教授 (2) 助教授 (3) 講師 (4) 助手 (5) 特任教授

問3 年齢は次のいずれですか。該当するものの番号を で囲んでください。

- (1) 29歳以下 (2) 30～34歳 (3) 35～40歳 (4) 40～44歳 (5) 45～49歳  
(6) 50～54歳 (7) 55～59歳 (8) 60歳以上

問4 大学での常勤としての教育経験年数は通算して何年ですか。今年度末現在でお答えください。

本学において ( )年( )カ月  
他大学を含めて( )年( )カ月

その他の教育経験があれば具体的に書いてください。

( )

問5 過去5年の授業担当について該当する答えの番号を で囲んでください。(複数回答可)

1) 全学共通教育の担当経験がある(それは次の内のどれですか。該当する番号を で囲んで下さい。)  
(1) 総合 (2) 基礎 (3) 外国語 (4) 健康・スポーツ科学

2) 学部専門教育の担当経験がある

3) 大学院教育の担当経験がある

4) 他大学等で非常勤講師として授業を担当した

5) 授業を担当したことがない

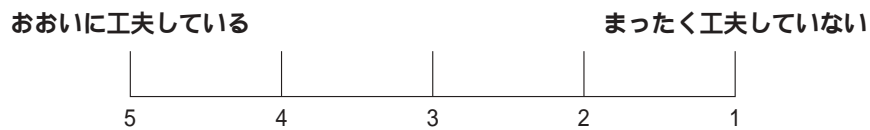
回答される あなた自身 の教育への関心等についておたずねします。

問6 大学教員の活動を、「教育」、「研究」、「社会的貢献」の3つに分けた場合、それぞれの活動をどの程度重要だと思われますか。百分率で（3つの和が100になるように）お答えください。

教育（ ） 研究（ ） 社会的貢献（ ）

問7 あなたは授業についてどの程度工夫していると思いますか。

「おおいに工夫している」を5、「まったく工夫していない」を1として、該当する程度の番号を で囲んでください。



問8 日々の授業を改善するためにあなたが「実際にしていること」、「実際にはしていないが重要だと思うこと」についておたずねします。なお、最近5年間、授業を担当しておられない場合は、「実際にはしていないが重要だと思うこと」のみお答えください。また、複数の授業を担当しておられる場合は、全学共通教育、学部専門教育、大学院教育の順で選び、さらにその中で複数の授業がある場合は、うち一つを選んでお答えください。

回答に際して選んだ授業科目について（該当する番号を で囲んでください）

1 その授業科目は、下記のうち、どれに当たりますか。

（1）全学共通・総合、（2）全学共通・基礎、（3）全学共通・外国語、

（4）全学共通・健康スポーツ、（5）学部専門教育、（6）大学院教育

2 授業の規模・種別について、下記のどれに当たりますか。（該当する番号を で囲んでください）

（1）実隆の履修者（出席者）が150人以上の講義、（2）履修者が150人未満の講義、

（3）演習・ゼミ、（4）実験・実習、（5）その他（ ）

以下の項目については、それぞれ該当するものを選び、下の( )内の該当する番号を で囲んでください。(複数回答可)

A 授業の内容・備成について

- (1) 学部等で冊子で配付されるもの以外に、履修する学生のためのシラバス(授業の目標、内容、授業計画、評価方法、課題などの詳細を記述したもの)を作成すること
- (2) 毎回の授業で概要(その時間のねらい、内容、課題など)についての説明を資料などで提示すること
- (3) 授業内容の意義や重要性について学生に理解させること
- (4) 学生の関心・好奇心を刺激するものとなるように授業内容を工夫すること
- (5) 本の読み方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方などの指導を重視すること

実際にしていること ( 1 2 3 4 5 )

実際にはしていないが重要だと思うこと( 1 2 3 4 5 )

B 授業の方法について

- (6) 授業時にテストを実施したり、レポートを課すること
- (7) 宿題を課するなど授業前後の予習・復習を重視すること
- (8) 学生の授業への能動的参加を促し、双方向的授業を目指すこと
- (9) 視聴覚メディアを積極的に活用すること
- (10) 話し方や板書の仕方を工夫すること

実際にしていること ( 6 7 8 9 10 )

実際にはしていないが重要だと思うこと( 6 7 8 9 10 )

C 授業改善の方法について

- (11) 授業のあり方について他の教員との話し合いをすること
- (12) 同僚の教員との間で授業を見たり、見せてもらったりすること
- (13) 大学での授業法に関する文献を読むこと
- (14) 授業に関する研修プログラムに参加すること(学外を含む)
- (15) 学生による授業評価の結果や授業への意見を工夫に生かすこと

実際にしていること ( 11 12 13 14 15 )

実際にはしていないが重要だと思うこと( 11 12 13 14 15 )

上記以外に重要だと思うことがあればお書きください。

( )

問9 過去5年間に学生による授業評価や授業アンケートを実施したことがありますか。該当する答えの番号を  
で囲んでください。

1) ある

「ある」と答えた方にお尋ねします。それは次のどれですか。該当する答えの番号を で囲んでください。

(複数回答可)

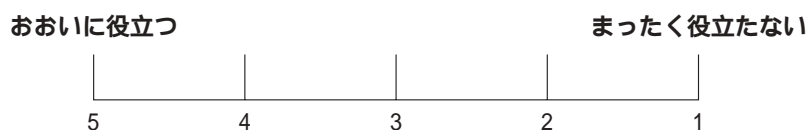
(1) 全学共通教育で組織的に実施した

(2) 学部専門教育など全学共通教育以外で組織的に実施した

(3) 個人的に授業アンケートなどを実施した。

2) ない

問10 大学(部局)が組織的に行う授業評価は授業改善に役立つと思いますか。「おおいに役立つ」を5、「まったく役立たない」を1としたとき、あなたの考えはどれですか。該当する番号を で囲んでください。



問11 本学の全学的なFD活動(FD研究会 従来の大学教育研究会を含、公開授業、教育改革シンポジウム等)に参加したことがありますか。該当する答えの番号を で囲んでください。

1) ある

「ある」と答えた方にお尋ねします。それは次のうちのどれですか。該当するものの番号を で囲んでください。

(1) FD研究会 (2) 公開授業 (3) 教育改革シンポジウム

2) ない

「ない」と答えた方にお尋ねします。その理由は何ですか。該当する答えの番号を で囲んでください。

(複数回答可)

(1) そうした活動があることを知らなかったから

(2) 都合がつかなかったから

(3) 参加することにとくに意義を見いだせなかったから

(4) FD活動に興味がなかったから

(5) その他(具体的に)



問12 所属する研究科・学部等のFD活動に参加したことがありますか。該当する答えの番号を で囲んでください。

1) ある

あると答えた方にお尋ねします。それはどんな活動ですか。

( )

2) ない

問13 本学以外の場所で行われたFD活動に参加したことがありますか。該当する答えの番号を で囲んでください。

1) ある

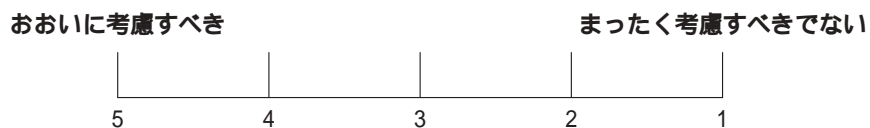
あると答えた方にお尋ねします。それはどんな活動ですか。

( )

2) ない

問14 採用、昇進の際の教員の業績評価において教育活動の実績のうち次のようなことをどの程度考慮すべきだと思いますか。「おおいに考慮すべき」を5、「まったく考慮すべきでない」を1としたとき、あなたの考えはどれですか。該当する番号を で囲んでください。

A 教科書、教材、学習プログラムなどの開発



B 学生による授業評価の結果



C FD活動への参加状況



問15 本学の教育を改善するために組織としてどんなことがとくに重要だと思いますか。次のうちから3つ選んで該当する番号を で囲んでください。

- (1) 全学共通教育カリキュラムの改善を図ること
- (2) 学部(大学院)専門教育カリキュラムの改善を図ること
- (3) 教員の授業を自由に参観しあえるようにすること
- (4) 学生の授業評価を実施しその結果を生かすこと
- (5) 学生9学力や興味・関心の状況について理解を深めること
- (6) 教員の研修の機会を増やすこと
- (7) 教員の業績評価の一環として教育活動の評価手法を確立すること
- (8) 教育の施設・設備の充実にもっと力を入れること

上記以外に重要だと思うことがあればお書きください。

( )

問16 本学の教育支援体制についての要望や日頃困っていることがあればお書きください。

問17 大学教育研究センターでは、昨年FD手帳を作成し、教員のみなさんに配付しました。FD手帳について、ご意見やご感想、活用の仕方についてのアイデアなどがありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。

資料2

授業（コース）のデザインと学習成果把握に関するアンケート調査

A．平成19年度後期におけるご担当の授業（コース）の状況についてお答えください。

- 1．その授業（コース）を担当されたのは今年で何回目ですか。当てはまる数値に をつけてください。
  - 1．初めて
  - 2．2 - 3回目
  - 3．4回目以上
- 2．履修登録した学生は何人でしたか。
  - 1．50人未満
  - 2．50人以上100人未満
  - 3．100人以上150人未満
  - 4．150人以上200人未満
  - 5．200人以上
- 3．履修登録した学生のうち、各回の授業に出席していた学生の割合は平均的にどれくらいでしたか。
  - 1．9割以上
  - 2．7割以上9割未満
  - 3．5割以上7割未満
  - 4．5割未満

B．授業（コース）全体を振り返って、授業（コース）をデザインしたとき（シラバスを書いたとき）の授業の目標（学生の到達目標）はどの程度達成できたと思いますか。当てはまる数値にひとつ をつけてください。

- 1．十分に達成できた
- 2．まずまず達成できた
- 3．達成できていない部分があった
- 4．達成できなかった

C．問Bでそのようにお答えになった理由として、以下から当てはまるものをすべて選び、数値に をつけてください（複数選択可）

- 1．成績評価結果をみて
- 2．学生による授業評価アンケートの結果をみて
- 3．学生から寄せられる授業の感想などを読んだり聞いたりして
- 4．授業をやっていて感じる手ごたえから
- 5．その他（差し支えない範囲で具体的に書いてください）

D．成績評価の方法についてお伺います。

- 1．成績評価はどのような手段で実施されましたか。当てはまるものすべてに を付けてください（複数選択可）
  - 1． Semester末に試験（ペーパーテスト）をした
  - 2． Semesterの中間に中間試験（レポート）をした
  - 3． Semester末にレポート課題を出した
  - 4． Semesterの中間にレポート課題を出した
  - 5． 学生に発表（プレゼンテーション）やディスカッションをさせた
  - 6． 小レポートや小試験を何回か課した
  - 7． 授業への参加状況（出席、発言など）を考慮した
  - 8． その他（差し支えない範囲で具体的に書いてください）
- 2．「1」で選択された試験・レポート等々を教員が見た結果を、学生にどのようにフィードバックされましたか。当てはまるものすべてに を付けてください（複数選択可） （裏に続く）

1. 採点して、ひとりひとりに返却した
2. 採点して、クラス全体に対してコメントを述べた
3. 返却もコメントもしていない
4. その他（差し支えない範囲で具体的に書いてください）

**E. 授業（コース）の教育成果をより確実なものにするための工夫についてお伺いします。次の事柄のうち、ご担当の授業で実施しておられたものすべてに を付けてください（複数選択可）**

1. シラバスに記述されている授業の進め方や求められる受講態度、学習習慣について、受講生に改めて説明した。
2. セメスター途中に何度か、小テストや中間テストをした
3. レポート課題などの宿題を何度か課した
4. 参考文献等を呈示した
5. 特に何もしていない
6. 「1」から「4」以外の方法で、学生に十分な授業時間外学習をさせるための工夫を行った。（具体的に書いてください）

**F. 授業（コース）の改善・充実についてお尋ねします**

1. **授業（コース）をデザインするときに考慮されたこととして、当てはまるものすべてに をつけてください（複数選択可）**

- 学生の関心・好奇心を刺激するように工夫すること
- 授業内容の意義や重要性を学生に理解させること
- 学力の多様化等の学生の現状に対応すること
- 学生が卒業後に生きる社会全体の情勢や変化を踏まえること
- 宿題を課すなど授業前後の予習・復習を重視すること
- 学生の授業への能動的参加を促し、双方向的授業を目指すこと
- その他（具体的に書いてください）

2. **現在担当しておられる授業（コース）をより充実したもの（教育効果の高いもの）にするために、必要と思われることとして、当てはまるものすべてに をつけてください（複数選択可）**

- 全学教育共通科目のカリキュラムの改善
- IT環境の整備
- FDの充実
- 教室設備の改善（受講生とよりコミュニケーションしやすい技術の導入など）
- その他

それぞれについて具体的にお書きください

ご協力どうもありがとうございました。

返信用封筒にて、大学教育研究センターまでご返送ください。